

ペーター・スローターダイク
操作されうる人間 遺伝子 - 技術の倫理状況についてのコメント

Peter Sloterdijk: Der operable Mensch Anmerkungen zur ethischen Situation der
Gen-Technologie, 2000

<http://www.bbpp.de/aufgelesen/depslot2.htm>

キーワード

遺伝子技術(genetische Technologien)

インター・インテリジェント(inter-intelligent)

逆症技術(Allotechnik)

客観的精神(objektiver Geist)

形而上学(Metaphysik)

向知性物質(nootrope Substanzen)

故郷喪失 (Heimatlosigkeit)

サイバネティクス(Kybernetik)

自己のもとにある (Bei-sich-Sein)

情報という原理(das Prinzip Information)

人工知能(künstliche Intelligenz)

人体形成手術(anthropoplastische Operationen)

同種療法的技術(Homöotechnik)

人間を製造する(Menschen machen)

人間改造技術 (Anthropotechnik)

ハイデガー(Martin Heidegger)

ヘーゲル(Hegel)

ヒューマニズム(Humanismus)

(凡例)

() は原文の括弧または挿入句，同じ原語の言い換え。

[] は訳者による補足。

原文に章節がないため，〔見出し〕を補った。

脚注のうち数字は原注，* は訳注。

〔1. 技術を「錯誤」の運命ととらえるのは形而上学への囚われによる〕

われわれはいま人間の黙示録が何か日常的な事柄であるかのような時代に生きている。そのことは、われわれの落ち度でもなければ、功績でもない。最も外的な（die äußerste 極端な）状況の精神がどのようにして文明化プロセスの最内奥において(im Innersten)出現するのかを経験するために、われわれは鋼鉄の嵐のなかに(Im Stahlgewittern)*いる必要も、拷問具の下にいる必要も、絶滅収容所のなかにいる必要もない。あるいは、そのような行き過ぎた暴行の近くで生きる必要もない。ヒューマニズム（人文主義，人間中心主義）的なみかけに馴染んでいることから追い立てられること(Vertreibung)は、現代の論理的な主要な出来事(das logische Hauptereignis)**である。人は善き意志に逃避しても、その出来事から逃れられない。しかし、その追い立てはさらに先へと進み、自己のもとにある Bei-sich-Sein という一切の幻想を侵食する。なぜなら、その追い立ては単にヒューマニズムを押しつけるばかりではなく、ハイデガーが 言語のうちに住まうこと Wohnen in der Sprache として語ったような総体的関係に影響を及ぼすからだ。存在の^{すみか}住処（das Haus des Seins）が〔改築のための〕足場の下に見えなくなっていることに誰も気づかなかったとしたら、その住処が改築後にどのように見えるかは誰にも分からないであろう。現下の世界情勢の精神史的・技術史的に最も注意を引く目印はまさに、技術文化〔デジタル革命〕が言語(Sprache)と書かれたもの(Schrift)からなる一つの新たな集合状態を生み出しているということ、その集合状態が、宗教や形而上学やヒューマニズムが言葉と書かれたもの〔聖典や哲学書〕について伝統的に解釈してきたものとはほとんど共通点をもっていないということである。存在の古い住処が、住まうという意味と 遠方の者を近みへもたらず という意味での滞在(Aufenthalt)がそこではほとんど不可能であるようなものになってしまったということが明らかになる。デジタルコードと遺伝子書き換えの時代において、話すことと書くことは、わが家でくつろいでいる(häuslich)といった意味をもはやもってはいない。〔デジタル〕技術による書面(組み版 Schriftsätze)は〔メッセージの〕伝達の外で発展し、わが家でくつろいでいる気分や、外部を馴染み深いものにする効果をもはや引き起こさない。むしろ逆に、それは外的で同化不可能なものの範囲を増大させる。言葉という地方(Sprachprovinz)は萎縮して、暗号を解かれた平文の部門(Klartextsektor)が膨張してくる。ハイデガーが『ヒューマニズムについて(ヒューマニズムを超えて)』の書簡において、人間における同時代の存在様式の際立った存在論的な目印を故郷

* エルンスト・ユンガー(Ernst Junger, 1895- 1989)が戦場での苛烈な戦闘体験を描いた『鋼鉄の嵐の中で』(In Stahlgewittern 1920)を念頭に置いていると思われる。

** logisch, Ereignis はともにハイデガーの用法を前提にしている。logisch についてはとくに Über den Humanismus, in: Martin Heidegger, Gesamtausgabe, Bd. 9, Wegmarken, Vittorio Klostermann, 1976. S.346 f. (渡邊二郎訳, ちくま学芸文庫, 1997年, p.96以降) 参照。

喪失 (Heimatlosigkeit) と名づけたとき、彼はこのような境遇を古風な言い回しで、しかし事実
に即した妥当な仕方で語ったのだ。

「故郷喪失が世界の運命となる。それゆえ、この運命 (Geschick 贈り届けられたもの全体)
を存在の歴史に即して思索することが必要である。……技術は、その本質において、存在の
歴史に即したひとつの運命 (Geschick 贈り届けられた器用さ) である。真理のひとつの形
態として、技術は形而上学の歴史にもとづいている」¹。

真理と運命の間には一つの連関が成り立つ (その連関が、無時間性へと向かう形而上学的な逃
げ場を超えるよう指示している)、これはヘーゲル以来、近代ヨーロッパの思考の偉大な直観に属
している。その直観は、キリスト教的な歴史神学の諸々の図式のうちにあらかじめ形象化されて
いる。東洋と西洋との間の太陽の軌道に関する古いヨーロッパ的図式にしたがってイメージされ
た一つの道を、ヘーゲルが精神に証明しようと試みるとき、彼はその直観を要約していた。精神
が〔東洋から〕遠く隔たった夕暮れの西洋に到着した後に生じる第二の無時間性に入り込むこと
に、ヘーゲルの精神は成功しているように見えた。ヘーゲル主義の最も極端な (Die äußerste 最も
外的な、最悪な) 状況とは、精神の完全な自己把握である。その地政学的な象徴は極西 (der äußerste
Westen 西洋世界の最も外側) である。極西において、自己のもとにあるということ (das Bei-sich-Sein) がその最終形態を獲得するに到るとされ、その後問題とされたのは、せいぜいの
ところ、人の住んでいない若干の辺境を人類の住まう地球の縁に配置することだけであった。本
質的には、すべての者が住まうという命題はすでに妥当するとされた。でもいったいどこに？

逃れられない歴史の西の果て (West-End 西欧の終焉) に。ミシェル・ウエルベック (Michel
Houellebecq) は小説『素粒子』*の結末において、生物学的な不死を発明して意気消沈している主人
公に、ヨーロッパの最も外側の岬において (an der äußersten Landspitze Europas)、「変わりやすい穏
やかな光」のもとで、アイルランドの大西洋のなかにみずからの死を求めさせた。それはまず第
一には、ヘーゲルへの適切なコメントにすぎない。もしもすべてが成就してしまうならば、人は
海に沈まなければならない。この世界の夕暮れ (Welt-Abend 西洋世界) において、錯誤 (Irre)
は終わったように見える。

それにしても、ハイデガーが小説家ふうの計画をもっていたならば、主人公に、そこで歴史が
さらにどのように進行するのかを待ち受けさせるために、丘の上に小屋を建てさせたであろう。
彼にとって、錯誤が続くということは明白であった。完全な自己のもとへの到来 (Zusichkommen)
が起こることなどありえない。むしろ、すべてのことが物語っている。歴史と技術による人間の
開示 (Offenbarung 啓示) とは、より高い緊張と眩惑の時代のなかに踏み込むことだということ

¹ Martin Heidegger, *Über den Humanismus*, Vittorio Klostermann, 1949, S. 30, 31 (GA.Bd.9. S. 339, 340
前掲訳, P.80 81)

* 原作 1998 年、邦訳、野崎敏訳、筑摩書房、2001 年

を。ハイデガーの眼から見て、真理に歴史を与えるという点で、ヘーゲルは正しかった。けれども歴史を日の出と日の入りの間の太陽の運行としてイメージしたのは不当であった。それと同様に、歴史をイオニア〔における自然哲学の発祥〕からイエーナ〔における“馬上の世界精神”ナポレオンによる“自由の勝利”〕へと進行させるという点でも不当だった。だが、こう修正することで、われわれは「目的論狂 *furor teleologicus*」をも克服したのだろうか？ ハイデガーは1946年時点の状況から、真理の歴史は太陽の軌道ではなくアテナイからヒロシマへと走る概念の導火線への着火と考えた。その導火線はさらに、われわれがいま見ているように、現今の遺伝子実験室のなかへと走って行く。それがさらに実験室を越えてどこへ伸びて行っているのか、誰が知りえているだろうか？ こうした技術的な知と能力の前進的な成長において、人間は、太陽の製造者〔原爆製造者〕、生命の製造者〔生命工学による生命製作者〕としての自らの姿を自分自身の前にさらけ出してしまった。かくして人間は、そこで人間にできること、行なっていることが、現実にも彼（人間）自身〔の所業〕であるのか、そしてこのような行為において彼（人間）は自己のもとに(*bei sich*)あるのか、という問いに答えなければならない立場へと追いやられている。

さまざまな結果に直面しても、この歴史が能力ある知 (*das könnende Wissen*) と知をともなった能力 (*das wissende Können*) の成功の歴史である限り、それはまた、真理の歴史として、人間による真理の支配の歴史として読まれなければならないということは否定できない。とはいえ、この歴史はただ真理の部分的な歴史として、人間とその営みによっていつもただ断片的にのみとらえられた真理の部分的な歴史として読まれなければならない。ニュー・メキシコ州の砂漠の上空で原子爆弾が閃光を発生して炸裂するとき、人間的な意味での自己への到来 *Zu-sich-Kommen* は何の役割も果たしていない。それでもオッペンハイマーはまったく厚顔にも最初の核実験をトリニティー (Trinity 三位一体)* と名づけた。〔クローン羊〕ドリーがメーと鳴くとき、精神はわが家で故郷にいるようにくつろいで自己のもとにある (*heimatlich bei sich zu Hause*) のではない。しかしそのドリーの製作者たちが自己固有のもの (*das Eigene* 自己所有) に思いをはせる時、それは特許という形をとる。

いまでも歴史は円環を閉じて完結しようとはしないのであるから、歴史と技術社会は、ハイデガーが錯誤 (*Irre*) という表現で示した運動のなかに依然として囚われ続けている。錯誤は自分の外に立つもの (*Existenz* 実存) の歴史的な運動形式を特徴づけている。自分の外に立つものは、わが家に戻ることを目指していようと、あるいはいかなる到着もない終りなき進行という様式をとっていようと、自己のもとにはなく、自分のものでないもの (*Nicht-Eigenes*) のなかを苦勞して通り抜けて行く。錯誤が意図的に目指されていようとしまいと、故郷喪失は根本的な状況で

* ロスアラモス原子力研究所が開発し1945年7月16日ニューメキシコ州アラモゴードのホワイトサンズ実験場で史上初の核実験に用いられた原子爆弾1号はこう名づけられた。スローターダイクはここでヘーゲル宗教哲学の父・子・聖霊の三段階図式とつなげている。

あり、自己把握における諸々の失敗は通例のことである。しかし、ここでは錯誤は時代における一つの常態のように提示されているので、次のような疑問がおのずと生じてくる。すなわち、なお形而上学と運命的に結び付けられているように見える錯誤のもとでも、形而上学の衰弱や「消滅（Verwesung 本質の毀損）」とともに、ある深い変容が生じているはずではないのかという疑問である。近代の人間における知と能力の途方もない成長は、近代人に向けられた錯誤の診断が、近代の潜勢力(Potential)が発現する以前の時代に向けられた診断と同じ仕方で妥当するのではないか、という疑問を押しつけてくる。ハイデガー級の思想家が 2500 年間にわたるヨーロッパの形而上学と技術のはてに、世界の軌道を運命的な錯誤の持続として解釈する根拠を依然として見ていると思っているという事実を考慮すると、ここにはひょっとして或る見かけ上の錯覚があるのではないかと、という推測がおのずと生じてくる。この疑問は、自己固有で本来的なものへの転換（Wendung ins Eigene und Eigentliche）として位置づけられた「国民革命 nationale Revolution」〔ナチズム〕の試みにハイデガーが失敗した後、錯誤からの帰還をどのように哲学的に思考すべきかについて、もはや何の提言もしていないという事実を考慮すると、いっそう説得力がある。存在の詩学への逃避は、共感をもって見ても、せいぜいのところ一つの一時的のぎでしかない²。

〔ハイデガーの〕錯誤理論は、目的を伴う場合も伴わない場合も、人間と存在との間の関係について修正を要する間違っただけの記述に由来している。こうした推測は強固なものになる。形而上学の解体というハイデガーの業績の意義は否認し得ないとしても、ハイデガーもまた、まったく持ちこたえることのできない存在論と不十分な論理学とを前提とする哲学的文法になお部分的に囚われ続けていた。ゴットハルト・ギュンターに依拠しつつ証言するならば、一値的な(einwertig)存在論（存在はあり、非存在はあらぬ）と二値的な(zweiwertig)論理学（真は偽ではなく、偽は真ではない、それ以外の第三者は与えられない tertium non datur）との結びつきに基づいた古典的な形而上学は、さまざまな道具、記号、芸術作品、機械、法、倫理、書物、その他あらゆる人工物といった文化的な諸現象を存在論的に適切に記述することに絶対的に無能な状態に陥る。なぜなら、こうしたタイプの形成物を把握する際、魂と物体、精神と物質、主観と客観、自由と機械論についての根本的な分割がまかり通ってしまうからだ。そのような文化的な諸現象は、その構成からして、精神的な「構成要素」と物質的な「構成要素」からなるどっちつかずの中間的存在である。したがって、その文化的な諸現象が二値的な論理学と一値的な存在論の枠内において「そもそも本来的に(eigentlich)」何であるかを述べようとするあらゆる試みが、見込みのない還元と縮小に陥るのは避けがたい。もしもプラトンのように諸々のアイデアを本来的な存在者

² それでもこの途中までの解決はもう一度弁護されることを待っている。途中までの解決と言ったが、完全な高みにいたる解決は可能なのだろうか？ Alain Badiou, *Le recours philosophique au poeme*〔アラン・バディウ「哲学の最後の頼みとしての詩」〕, in ders. *Conditions*, Paris 1992, S. 93-107 参照。

と考えるならば、物質は単に或る種の非存在となってしまうだろう。また、もしも物質を実体化するならば、諸々のアイデアは非本来的で存在しないものとして、わきへと転落してしまう。こうした間違いは言うまでもなく個々人による失敗ではなく、或る文法が持ついくつかの限界を指し示している。これらの間違いはこうした意味で、諸々の運命や時代としての誤謬のかたまり (Irrtümer) なのである。このような観点から見れば、錯誤とは、存在者の全体を二値性によって支配しようとするプラトン・アリストテレス的なプログラム (もっと一般的に言えば、高度な文明の形而上学的なプログラム) の世界史的な痕跡以外の何ものでもないであろう。

〔2. 第三のものが与えられ、精神/物という二分法が終焉する〕

ヘーゲルの業績によって、人工物の存在論的な地位を「客観的精神」という表題のもとに規定することを可能にする論理がいまや初めて創造された。ヘーゲルの分析は圧倒的に精神論的・文化論的な方向性をもっていたため、この衝撃は、知的な機械〔人工知能〕についての理論および実践としてのサイバネティクスと、システムと環境世界との統一性についての研究としての現代生物学とが、今度はシステム理論と有機体理論の側からこうした問いを新たに設定し直すことを強いるまで、押しとどめられたままでいた。ここで、客観的精神というコンセプトは情報という原理 (das Prinzip Information) へと転換する。情報という原理は、思考されたものと事物との間の、内省の極と物体の極との間の、精神と物質との間の第三の値として登場する。知能をもつさまざまな機械は、文化によって創造された人工物一般と同じく、思考に対して次のような事態をより広範囲にわたって承認するよう強要する。その事態とは、「精神」ないしは内省 (Reflexion) あるいは思考が、事物の在庫〔例えばパソコンのメモリーやデータバンク〕の方へまったくあからさまに注ぎ込まれ、在庫のうちに再発見・再加工可能な仕方で留まっているという事態〔コンピューターへの情報のインプットと保存〕である。それゆえ諸々の機械と人工物は、〔情報の〕運び屋のなかに情報が刻印される (die Einprägung der in-formatio)* 以前の状態を実際に否定することである。これら機械と人工物は、その意味で記憶であり、あるいは客観的になった内省である。こうした事態を考えるためには、少なくとも三値論理学と結びついた二値的存在論を必要とする。したがって、実際に存在する肯定された否定と、否定された肯定、ならびに存在する無と、無を含む存在者が存在するということが明確にされうるような認知的道具立てを必要とする。「情報が存在する (es gibt Information それが情報を贈与する)」という命題は、結局のところこれ以外のことを述べてはいない。ヘーゲルとハイデガーとの間での思想の大闘争においては、この命題を可能とし強固にすることが問題なのである。ギュンター、ドゥルーズ、デリダ、ルーマンといった思想家たちはそうした闘争の終わりに介入してきて、一連の足跡を残している。彼らはすべて、「第三

* information は in-formatio (中へと形づくる) というラテン語に由来する。

のものが与えられている tertium datur」状況を手に入れようとして格闘しているのだ。

「システムが存在する」、「記憶が存在する」、「諸文化が存在する」、「人工知能が存在する」といった命題は、「情報が存在する」という命題に依存している³。「遺伝子が存在する」という命題もまた、新たな状況の単なる一つの現れとしてのみ理解される。その命題は、情報という原理が自然の圏域へと転移した実り豊かな飛躍を告知している。現実を支配しようとするもろもろの企図におけるこうした過剰な成果は、主観 客観関係のような伝統的な理論の姿への関心を色あせたものにする。自我と世界という布置 (Konstellation) もまた、その輝きの多くを失い、個人と社会という使い古された両極について黙して語らない。しかしながら現に実在する記憶や自己組織化するシステムといったイメージ〔の登場〕とともに、とりわけ自然と文化との形而上学的な区別が無効となった。なぜなら、〔自然と文化という〕こうした差異の両面は、単に情報とその処理の局地的な諸状態だけを描き出しているにすぎないからだ。このような洞察のあとづけは、自然に対して文化を対置することで生きてきた知識人たち、そしていまや再び反動的な立場に身を置く知識人たちにはつらいものがあるということを感じなければならぬ。

もし歴史的人類をいわゆる錯誤に陥らせるいっそう深い動機づけを求めるならば、その理由の一つは、形而上学の時代の立役者たちが明らかに、誤った記述で存在者全体にアプローチしたという事態のうちに見出される。彼らは存在者を主体的なものと客体的なものに分割し、一方の側に魂をもつもの (das Seelische)、自己をもつ人間的なもの (das Selbsthafte und Menschliche) を据え、他方の側に物的なもの、機械的で非人間的なものを据える。こうした区別を実際に適用することを支配と言う。技術的な啓発は事実上、機械製造と人工補装具〔手足の延長としてのさまざまな道具〕によって生じるが、この歩みにおいて、こうした二分割が持ちこたえられないということが判明する。それは、ギュンターが力説するように、こうした二分割が主体と精神の側に、本当は他方の側〔物の側〕に属している特性や能力を過剰に与えるからだ。同時に、そのような分割は物質または素材の側に、よく見ればそれらが備えているはずの充実した諸特性を否認する。もしもこの両面における伝統的な誤りが修正されるならば、ラディカルで新しい見方が文化的な客体と自然的な客体の双方について成立するだろう。「情報を賦与された物質」、言い換えれば高等なメカニズムが、自己プログラミングする知能や対話能力、自発性や自由といった見かけをとるところまで、擬似主体的な働きをもたらすということ、そしてどうしてそうなのかを人々は理解し始めている。

存在者に対する間違った形而上学的分割に対する修正を、人間の自生的な自己関係に深く介入する、巨人族との戦いと呼んでも、言いすぎではない。そうした修正は多くの人々によって、自己の独自性を奪うもの (Enteignung) として嫌疑をかけられ、技術による悪魔的行いとして拒否

³ 批判的に見れば、「脱構築が生起する」、「砂漠が成長する」といったデリダとニーチェの存在論的テーゼにも当てはまる。

される。そうした成り行きの不気味さは、その成り行きが避けがたい帰結によって刻印されているがゆえに、否定しがたい。技術の最前線で生じる一切のことが、いまや人間的な自己了解にさまざまな帰結をもたらすため、そうした成り行きがもつ魅惑もまた観察者の眼を引く。技術の進展のなかで、主体性の城塞、思考し体験する自我もまた侵蝕される。しかも象徴的な脱構築（ちなみにそれは世界の諸文化のなかで、例えば神秘的でヨギ的な諸システム、否定神学とロマン主義的イロニーなどのなかでさまざまに先取りされている）によってのみならず、例えば向精神薬の助けによって精神的な気分（*Befindlichkeit*）を変えること（この数世紀来の医薬文化のなかで、ここ数十年来の精神医学のなかで、通例となったやり方）によっても侵蝕される。ここにさらに近い将来、向知性物質*による観念内容の誘導（*die Induktion von Ideeninhalten durch nootrope Substanzen*）も付け加わる。しかしさまざまな遺伝子技術のなかには、機械的なものが主体的なもののへきわめてセンセーショナルに侵入していく萌しが見えている。なぜなら、遺伝子技術は自己の身体の諸前提をなす広大な領域をさまざまな人工的な操作の射程内に引き込んでいるからだ。人工的な遺伝子操作には、近い将来完全に「人間を製造する」ことができるようになるという、多かれ少なかれ空想的な通俗的なイメージが結びついている。そのような空想のなかでは、さまざまな素朴な生物学主義的な要素が、何の役にも立たないヒューマニズム的要素および神学的な要素と張り合っている。こうした空想的な意見の提唱者たちのうちには、人間の生成をもたらした進化論的な諸条件を洞察した跡はまったく見られない⁴。「主体」あるいは「人格」が恐怖に駆られて空想世界へ侵入するための基礎は、いわゆる客体の側、すなわち遺伝子が示している生物の物質的な塩基構造のうちには、古い質料的存在論の意味での物質的なものはもはやまったく見出されず、情報を与えられ与えるという最も純粋な形式が見出されるということである。なぜなら、遺伝子とはタンパク質という分子を合成するための「指令」^{ジーン・ゼー}以外の何ものでもないからだ。こうした事象のなかでは、伝統的に解釈された人格的主体は、それが存在論的に馴染んでいたものを - 伝統的に描かれた自己の側も、人がこれまで知っていたような物の側も - もはや何ひとつ再び見出すことがないのは明らかである。それゆえ、そうした人格的主体にとっては、反ヒューマニズムの深刻な事態に直面したかのように見える。人格的主体にとっては、人間的な主体ないしは精神をもった人格として世界を親しみある故郷として我がものとし（*sich heimatlich aneignen*）、世界の外部性を自己のなかへと統合するというヒューマニズム的でオリムピック的

* 脳内物質の循環を促進する物質または薬剤

⁴ 例えばユルゲン・ハーバーマスは、彼が「遺伝子の奴隷制」と呼ぶものに抵抗しなければならないと考えているが、これが第一のケースである。エルンスト・トゥーゲントハットは「道徳のためになるような遺伝子一つもない」と言うことが必要だと見なしているが、これが第二のケースである。これら二つに加えて、ロベルト・シュペーマンはカトリック的な人格主義の見地から、遺伝子技術として理解された「人間改造技術（*Anthropotechnik*）」に対して人間の尊厳を擁護しようとしている。

なプログラムに対する鋭い対立が現われてきているように思われる。そうしたプログラムとは反対に、主体はいまや事物性と外部性のうちへと余すところなく沈没し、そこで消滅するかのように見える。

しかし当然のことながら、このような恐ろしい表象もまた、ひとつのヒステリックな幻影にすぎず、そのようなものとして、存在者についての間違っただけの形而上学的な根本的分割の否定的な結果なのである。内省し構成する威力としての人間は、完全に自己のもとに在ること(Ganz-bei-sich-Sein)と完全に自己の外に在ること(Ganz-außer-sich-Sein)との間で選択しなければならないような決定力あるもの(Instanz)ではない。人間は全面的な集中(totale Sammlung)と決定的な分散(definitive Zerstreung)との間でいずれかを決断できないように、全体的に自己を照らし出すこと(totale Selbstdurchleuchtung)と完全な自己喪失(völlige Selbstverfehlung)との間でどちらかを決断することもできない。人間は開けた明みの局地的な可能性(eine regionale Möglichkeit von Lichtung)であり、集中の地方的な可能性(eine lokale Möglichkeit von Sammlung)なのである。人間は、真理と権力が比較的集中している場所ではあるが、すべてを集める者(All-Sammler)ではない。このことは、^{ロコス}論理と詩作についてのポスト形而上学的な考えを結果するが、その概念はおそらくいつの日にかハイデガーの最も影響力のある構想として理解されるであろう。このことは、多様性についてのドゥルーズの教説への移行を可能にする。これこそ、《Seyn》〔原存在〕の思索者〔ハイデガー〕が、絶対精神についてのヘーゲルのイデオロギーとそのヒューマニズム的なさまざまなコピーとの長期にわたる抵抗戦において、苦勞して切り拓いたものなのだ。これについて『ヒューマニズムについて』の書簡には、こう言われている。

「思索が形而上学を超越するのは、思索が形而上学よりもさらに高く上昇しつつ、形而上学を超えて、そしてどこかへ向けて形而上学を止揚することにおいてではなく、思索がもっとも近いものの近さのうちに帰還しつつ高まることにおいてである。……下降は、人間らしい人間(homo humanus)の存在へと身を開きそこへと出で立つあり方(Existenz 脱存)の貧しさのうちへと導く。……存在の真理を思索するとは、同時に、人間らしい人間の人間らしさ(humanitas 人間性)を思索することを言っているのである」⁵。

この一節は注目に値する。それは単にこの一節が、ハイデガーの表向きの「反ヒューマニズム」を十分に告発してはいない密告者たちを悪者に行っているからという理由だけではない。この一節は、人間的脱存(Existenz 実存)を或る高貴な弱さと局地的な詩作力として理解するための出発点を提供しているのだ。現存在とは尋常ならざるもののひとつの情熱(受苦)(eine Passion des Ungeheuren)なのである。そして、脱存(実存)の貧しさとは、動物たちの世界の貧しさ(Weltarmut)ではなく、尋常ならざるもののうちに単純にさらけ出されていることなのである。ここでは、ア

⁵ Heidegger, *a. a. O.*, S. 42, 43 (GA, Bd. 9, S. 35.2 前掲訳, P.111 112)

ウグスティヌスにより近く、ヘーゲルとフッサールよりもパスカルにより近いようなハイデガーに出会う。ちなみに、これらの事態をむしろ、よりニーチェ的な言葉でもって表現できる。その場合には、人間とは、ひとつの力の関数あるいはひとつの圧縮、ないしはひとつの合成の好運であると言えるかもしれない。

西欧世界の大部分をつかんで放さない反テクノロジー的ヒステリーは、形而上学の変質の産物である。なぜなら、そうしたヒステリーは、そこでは存在者についての虚偽の分割が超克されるプロセスに反抗するために、そうした虚偽の分割を固く保持しているからである。このヒステリーは、語の本質的な意味で反動的だ。なぜなら多値性を理解することなくこれに対立する古臭い二値性のルサンチマンを表現しているからだ。これは、依然として無意識のうちに形而上学的に動機づけられているような権力批判の習慣にとくに当てはまる。形而上学の図式においては、主体と客体への存在者の分裂は再度、主人と奴隷の間の、ならびに労働者と素材物質(Material)との間の落差のうちに自らを映し出している。例えば、このような構図の内部では、権力批判はただ、主体・主人・労働者の側に対する抑圧された客体・奴隷・物質の側の抵抗として明確に表現されるだけである。しかし、「情報が存在する」という命題、またの名は「システムが存在する」という命題が有効となって以来、このような対立は意味を失い、ますます葛藤幻想へと膨れ上がって行く。そのヒステリーは実際は一人の主人を探し求めているが、それはその主人に反抗できるようにするためである。だが主人という俗受けはもうとうに解体しかかかっていて、とりわけ反抗的に凝り固まった奴隷の側からの要請として生き長らえているということがありうる。つまり主人という俗受けはすでに歴史的なものとなった左翼として、博物館入りし〔骨董品と化し〕たヒューマニズムとして生き長らえている。それに対して、生き生きとした左翼原理は創意あふれる体制批判によって繰り返し新たに確証されなければならない。ちょうど、人間らしい人間を思考することが、ヒューマニズム的デマの形而上学への反映に対する詩的な反抗においてのみ自己主張できるのと同じように。

〔 3. 技術が人間を贈与する 操作されうる人間 〕

すでに示したように、人間らしい人間を思索するとは、人間であること(Menschsein)と開いて明るくすること(Lichtung)*との等値が妥当するような次元を明らかにすることを意味する。しかし、開いて明るくすることは、いまやお分かりのように、それが技術から発生した(technogene)という由来抜きには考えられない。人間は手ぶらで開いた明るみのなかに立って

* ハイデガー「“ヒューマニズム”について」のなかの用法。Heidegger, GA.Bd.9, S.323. 前掲邦訳 P.37 参照。

いるのではない。ハイデガーの pastoral (牧歌, 牧師) 的隠喩群が示唆するように, 資産 (手段) をもたずに〔ただ〕目をさましている牧人として家畜の群れのかたわらに立っているのではない。人間は石器とその後継となる道具を手にした。人間が強力になればなるほど, 人間はますます, まだ握りがついている道具を見放して, 入力キーがついた道具によって置き換えるようになる。この第二の機械の時代には, 「行動すること」は指先の操作に席を譲って後退する⁶。人間と人間性のための早産児保育器は, ハードな手段の諸技術によって生産され, ソフトな手段の諸技術によって和らげられる。われわれは, 原理的には技術が存在するような平面 (計画) の上にいる (Nous sommes sur un plan où il y a principalement la technique.) *。もし「それ」が人間を贈与するならば (Wenn "es" den Menschen gibt 人間が存在するならば), それは, 或る技術が人間を原人性〔Vormenschheit 前人間性〕から出現させるに到るからだ。技術は本来的に人間を贈与するもの (das eigentlich Menschen-Gebende) であり, あるいは, es (それ) が人間を贈与しうるような計画 (der Plan, auf dem es Menschen geben kann 人間が存在しうるような平面) なのである。それゆえ, もしも人間がさらなる産出と操作に自らを晒すとしても, 人間にとって何も異質なものは生じない。そして, もしも人間が自らを自動技術的に (autotechnisch) 変化させるとしても, これらの介入と補助は, 人間の生物学的・社会的な自然本性への或る非常に高い次元の洞察において生じるということを前提にすれば, 人間は倒錯的な〔自然に反する〕ことを何ひとつしてはいない。その非常に高い次元の洞察とは, かかる介入と補助は進化のポテンシャルとの利口で勝ち目のある真の共同製作として効果を発揮できるようになるという洞察である。

カール・ラーナーが次のように強調するとき, 彼はこうした認識をキリスト教的言葉遣いで明瞭に述べている。すなわち, 「今日的な自己実践 (Autopraxis) をする人間」は, 「カテゴリーとしての自己操作」の自由 (eine Freiheit der "kategorialen Selbstmanipulation") を利用する。その自由は, ヌミノーゼ的な自然強制からキリスト教が解放されていることに発している。イエズス会 (策謀家) ラーナーのこの陳述によれば, 自己操作的に自らを形成 (gestalten) すべきであり, またそう欲するということは, 成熟した人間のエートスに属している。

「たとえば, この自己操作の規模と適切なあり方がこの先なおも不明確であるにしても, 人間は操作されうる人間 (der operable Mensch) であろうとするに違いない。……しかし, 人

⁶ このモチーフは, とりわけフィレム・フルッサー (Vilém Flusser) が議論に持ち込んだ。〔フルッサー (1920-1991) はドイツのユダヤ系哲学者。『移民の自由 ナショナリズムへの反論 (The Freedom of the Migrant: Objections to Nationalism)』『サブジェクトからプロジェクトへ』『テクノコードの誕生: コミュニケーション学序説』などの著作がある〕

* ハイデガー「“ヒューマニズム”について」のなかの nous sommes sur un plan où il y a principalement l'Être. (われわれは, 原理的には存在与えられているような平面の上にいる) の言い換え。Heidegger, G A. Bd. 9, S.334〔前掲訳, P.66〕

間の自己操作の未来はすでに始まったというのは真実である」⁷。

〔 4. 逆症技術から同種療法的技術へ 〕

同じ洞察を、ラディカルに解釈された史的人間学(eine radikalisierte historische Anthropologie)の言語で表現することができる。すなわち人間の現在の状況を、自家移植形成術による豪華さの開発(eine autoplastische Luxusentwicklung)に由来すると解釈する。この開発のなかでは、可塑性(Plastizität)こそが基本的現実であり、逃れられない課題であり続けるのだ。しかしながら、臓器移植から遺伝子治療までの最近可能になった人体形成手術(anthropoplastische Operationen)を、引き続き間違った形而上学的な区分の相のもとにとらえることがないよう、気をつけなければならない。例えば、依然として一人の主体主義的な主人(ein subjektivischer Herr)が或る客体化された素材物質(eine objektivische Materie)を奴隷化しようとしているとか、あるいはもっと劣悪な表現としては、自己自身を超主人(Überherr)へとさらに形成し、自分よりも低次の従属的な素材物質を意のままに支配するといったとらえ方である。奉仕する素材物質に対して権力を行使する主人主体(Herrensubjekt)という図式は、古典的な形而上学とそれらのさまざまな単純な二値的な政治と技術が支配的だった時代においては、否定しがたい説得力をもっていた。主体主義的な主人は、もしも道具を投入するならば、客体を奴隷化し、その客体の固有な自然本性をほとんど無視する。客体自身が、彼らの側に主体性ないしは主人の自由への権利を請求できる人間である場合には、なおさらである。これらは古典的な形而上学の時代にあっては、傾向としては真実であった。ここから、単純な道具と古典的な機械から読み取られる技術についての一つのイメージが生じる。そのような道具と機械は、自然に対抗する形で、眼前に見出されたものに暴力的に切り込み、素材物質をそれらには無関係で疎遠な目的のために利用する限りにおいて、事柄の性質上すべからず逆症技術的な(allotechnisch)*手段である。素材物質についての古い概念においてはいつでもすでに、物質はギリギリで抵抗する最小限の適性を基盤にさまざまな他律的な利用のなかでつ

⁷ Karl Rahner, Experiment Mensch. Theologisches über die Selbstmanipulation des Menschen, in: *Die Frage nach dem Menschen. Aufriß einer philosophischen Anthropologie, Festschrift für Max Müller zum 60. Geburtstag*, Freiburg/München, 1966, S.53. [カール・ラーナー「実験人間 - 人間の自己操作についての神学的考察」:『人間への問い - ひとつの哲学的人間学の概観(マックス・ミュラー還暦記念論文集)』] この特別なテキストについて教示してくれたラファエル・カプッロに感謝する。

*Allotechnik は Allopathie, allopathy (アロパシー、逆症療法または対症療法)からの造語。生体は病気を治そうとして発熱したり下痢をしたりする。生体が病気を克服しようとするそうした働きに対して解熱剤や下痢止めなどを用いて逆のことをする治療法を「逆症(対症)療法」医学という。これと同じ精神で、人間にとって自然の不都合な現象を強引に抑え込もうとする技術を特徴づけるのに、スローターダイクは Allo-technik (逆症技術) という造語を提案している。

ぶされていく、と考えられてきた。このような古めかしい技術は物の世界を存在論的な奴隷状態に置く。知性自身は昔から、単に外的に利用され不自然に捻じ曲げられた諸物の他性を味方につけることができた場合に、自身がこうした奴隷状態に陥ることに逆らってきた。そこから、強迫的な観念論（理想主義）の時代(Zeitalter des Zwangsidealismus)には、解放を目指す「唯物論的な」選択が生じてきた。古い手工業の領域ではせいぜい、名人の知恵は諸物を強制しないことのうちに成り立つというヒントがあるくらいだ。思考の巨匠^{マイスター}たちのうちで、どのようにして妄想と強迫なしに、事柄のポテンシャルに権力を結びつけうるかを最も明快に指摘したのはスピノザであった。〔スピノザが言うには〕「例えば、私がこの机を自分の意のままにすることができるという場合、私がこの机を、牧草を食べる一つのモノにしてしまう権利をもっているということを考えているわけではけっしてない」⁸。逆症技術の領域における極端な（最悪な）状況は、暴行と破壊のもろもろの手段へと至る特権的な入り口を確保しようとする闘争である。これらを極端（最悪）と感じる意識は、暴行者とその犠牲者との闘争への洞察を通じて生じてくるのだ。

「情報が存在する（それが情報を贈与する）」という命題の段階では、物質と人格を他律化・奴隷化する技術という古いイメージはその説得力を失う。情報技術とともに、支配する形ではない操作性が成立しつつあり、われわれはそれの目撃者となるだろう。そうした操作性の形に「同種療法的技術 Homöotechnik」という名称を提案したい*。この技術が欲することができるのは、その本質からして、おのずから「事柄そのもの (Sachen selbst)」であるもの、あるいは事柄そのものになりうるものにほかならない。素材はいまや、自分の思い (Eigensinn) から構想され、素材の最大限の適性 (Eignungen) から操作のうちに取り込まれる。それら素材は、伝統的に「原材料 (Rohstoff)」と呼ばれてきたものであることをやめる。原材料は、原主体 (Rohsubjekte 粗野な主体) おとなしい言い方をすれば、ヒューマニスト、別の言い方ではエゴイスト たちが、それらに対して粗野な技術 (Rootechniken) を適用するところのみ存在する。同種療法的技術は実際に現存する情報と関わるので、存在するものへの非暴力的な道だけを前進して行く。それは情報知識の集積とネットワーク (Intelligenz) を知的に取り上げ、情報知識の新しい状態を生み出す。同種療法的技術は具体化された質に対して無知でないことによって成功する。同種療法的技術は、旧来型の技術と同じく利己的にローカルに投入される場合においても、〔情報ネットワークのなかの〕知的協働 (ko-intelligent)、情報協働 (ko-informativ) の戦略に賭けなけれ

⁸ Spinoza, *Tractatus politicus*, IV, 4.〔スピノザ『国家論』 畠中尚志訳、岩波文庫、1976、P.53〕

* Homöotechnik は Homöopathie, homoeopathy (ホメオパシー、同種療法) からの造語。病気の症状と同じような症状を引き起こす物質をごく微量だけ体内に入れることで、逆に病気を治そうとする治療、言わば「毒を持って毒を制す」治療をホメオパシー (同種療法) という。情報の管理操作を中心に組み立てられている現代のスマートな最新技術の特徴を表すのにスローターダイクは Homöotechnik (同種療法的技術) という造語を提案している。

ばならない。それは支配 (Herrschaft) という性格よりもむしろ協働 (Kooperation) という性格を有している。〔技術とその対象とが〕非対称な関係のもとにある場合でも、そうである。現代の傑出した若干の自然科学者は、「自然との対話 (Dialog mit der Natur)」というメタファーのもとに、これと類似したイメージを表現している。人文科学の側からはフーコーが、強力であれという強制と好機から人は逃れることができないと断言した。こうしたやり方でフーコーは、権力批判の形而上学的な結節点を解体したのである。ここにひとつの思考様式が芽生えてくる。それは、現代の芸術哲学、とりわけアドルノにおいて先取りされた思考法である。とはいえ、それはまだ依然として「客観の優位」という誤解を招く表題がつけられていた。この思考法がいまや、技術哲学からも、そして何よりも社会理論とその通俗的普及者たちからもあとづけられるのを待っているのだ。さまざまな技術を発展させ開発するということは、今後は、物体化された情報知識の総譜*を読むこと、そして、その総譜のなかの独特な曲を演奏し続けるよう援助することを意味する。同種療法的技術の最も極端な状況は、情報知識の協働 (Ko-Intelligenz) を真面目に追求するケースである。こうしたケースのなかで、かつての主人である二値論的時代の主体は幻影になりはててしまったということがさらけ出される。このことが広範な基盤の上で理解されないうちは、情報から遮断された (desinformiert) 国民は、扇情的な文芸評論家たちによる語彙使用のもとで、〔技術による支配という〕無理解な脅迫についての歪められた議論へと連れ去られるであろう⁹。

〔 5. 無理解から来る技術不信 〕

ハイデガーが教えたように、技術とは発掘 (Entbergung 隠されたものを掘り返すこと) の一様式である。それは、自分からはけっして明るみに出ることのない成果 (Ergebnisse) を明るみに (ans Licht) もたらず。それゆえ技術を、成功を促進する仕方と特徴づけることもできよう。さまざまな技術がさまざまな文化と事業企画とのあいだに葛藤を引き起こすところには、競争が生じるが、この競争が歴史をつくり出すのだ。歴史は、人間がますます先取りの労働し事物がおのずから生起するのを待ってられない状況にはまり込むような時代形式 (Zeitform) へと導く。それゆえ、一方では製造技術と経済事業とのあいだに、他方では民族誌技法 (Ethnotechnik) と戦争とのあいだに、ひとつの特徴的な対応関係が存在する。企業家と軍司令官にとって重要なのは、

* 例えば AGCT の 4 文字で表されたゲノム配列情報。

⁹ ドミニク・ルクールはすでに 1993 年に、遺伝子技術についての偽りの議論に対して、次のようなコメントを加えて警告していた。「〔遺伝子技術という〕方法を究極的には自由の増大という意味で利用することができないのかどうか、という問いを人々は十分につきつめて問うてはいない」(ロジェ・ポール・ドロワとの対話『ルモンド』1993年6月1日)。

ライバルや敵との間で展開される成功をめぐる競争を自分に有利なように決することである。彼らは他の者たちよりも早く利口になりたいと欲するよう運命づけられている。けれども彼らは通常、洗練されたエゴイズムの現段階に相応する程度にしか利口になれない。彼らは原主体（粗野な主体）と原材料（粗野な材料）との関係から脱することができないのだ。

以上のことが妥当する限りでは、同種療法的技術もまた悪の問題に触れてしまっている。例えば、知性を促進するもの〔知能の改善〕の際たるもの（par excellence）においては、悪の問題がもはや物と人間を奴隷化しようとする意志としてではなく、むしろ認知上の競争において他人を不利にしようとする意志として現われている¹⁰。古典的な逆症技術は、嫌疑という思考形式と暗号解読的な合理性とともに失われたというのは、けっして偶然的な観察ではない。そうした技術の精神的な堆積物は終始一貫してパラノイア（偏執病）である。ポスト・パラノイアの理性文化の出現はたしかに、技術的にもコミュニケーション的にも非常に発達した諸文明の進化に依拠する。しかしその出現は二値性の時代からの強力な慣性によって、そして存在者一般との関わりにおけるその時代の暴力のハビトス（習慣）によって遅延させられている。いま現在の疑念に満ちた気分でさえも未来においては現実に適合した気分であるという想定に、1945年8月、アメリカ合衆国の戦略家たちは最も強力な寄与をしてしまった。彼らはこのとき逆症技術の最悪の（最も外的な）兵器である原子爆弾を人間に対して直接投入するのを控えなかった。そのことによって彼らは、最高のテクノロジーと低劣な主体性が野合しはしないかという猜疑心に、一つの画期的な論拠を手渡してしまった。ヒロシマゆえに人間は、最先端の技術者たちは慎みのないものたちだと信じこみ、遺伝学においてオープンハイマーやトルーマンに匹敵するような人々に不信感をいだくもっともな根拠をもっている。これらの固有名詞は、一時代の長きにわたって原主体（粗野な主体）と逆症技術とが互いにお似合いだったという事実を要約している¹¹。こうした布陣(Konstellation)を前にした恐怖から、遺伝子は biotech century（バイオテクノロジーの世紀）の原材料として、産業革命における石炭と同様の役割を果たすであろうと予言する言説も語られる¹²。そうした話は、人間と事物との関係と同じく人間同士の関係も、いつの時代で

¹⁰ アメリカの戦略家エドワード・N・ルットワークは、(米、日、欧)経済権力ブロック間の「地政学的・経済学的に一極集中的な(geo-ökonomisch)軍拡競争」を、21世紀における最も危険で最もありそうな展開として描き出している。

¹¹ この二人の名に、ユーリ・オフチニコフという名前がつけ加わる。彼はソヴィエト科学アカデミー副会長で、大規模な生物兵器生産の必要性についてブレジネフを説得した。生物兵器は核兵器とは違って、人間に対する戦争に投入されることはなかった。このことが逆症技術の倒錯の限界効用が低減しつつあることを示してはいないかを検討してもよいだろう。

¹² 例えばジェレミー・リフキンは同名の著書『Biotech century 『バイオテク・センチュリー』鈴木主税訳、集英社、1999年)のなかで、バイオテクノロジーによって可能となった新たなルネサンス文化という好機を支持している。

も、二値的〔論理による〕支配あるいは疎外された物質に対する粗野な主体の思いのままの処理といった歴史的モデルにならって形成されざるをえないという勝手な憶測に由来している。

〔 6 . 同種療法的技術は威圧的な支配を終焉させる 〕

このように嵩じた恐怖の姿勢に根拠はあるのだろうか、そして未来にふさわしいのだろうか？これは吟味に値する。事柄そのものの複雑さからして、逆症技術の習慣はもはや同種療法的技術の領域にまで食い込んでくることはないだろうという推測がおのずと生じてくる。遺伝子の総譜〔ゲノム〕は暴力を行使する者とは協働できないだろう。それは、開かれた市場が単に主人の気まぐれに従うものでないのと同様である。それどころか同種療法的技術思考 これまでは生態学や複雑性の科学という標題のもとで予告されていた思考 は、敵対者のいない、支配から自由な関係についての倫理を解き放つ潜勢力をそなえてはいないかと問うことも許されるだろう。同種療法的技術思考は、おのずから、他なるものの物象化（Verdinglichung）よりもむしろ共存するもの（das Mitseiende）の内的な諸条件への洞察を目指しているのだから、疑いもなく自らのうちにこうした傾向を潜在的に（virtuell）有している。逆症技術の世界のなかでは、主人たる主体がなおも原材料に命令を下すことができたが、これに対して同種療法的技術の世界のなかでは、原主人（粗野な主人）がもっとも繊細な物質〔例えば遺伝子〕に権力を行使するという構図はますます不可能になるだろう。ネットワークで結ばれた世界の非常に濃密になったコンテキスト（Kontext 共同テキスト）は、威圧的（主人的）な入力（herrische Inputs）^{インプット}をもはや好意的に受け付けはしない。ここでは、無数の他者を共に技術革新^{イノベーション}による勝利者にするものがひたすら首尾よく普及していく。もしもこうした文明化の^{ポテンシャル}潜勢力が顕在化するならば、同種療法的技術の時代は、錯誤の働く余地がいっそう狭くなり、他方で充足とポジティブな結合の余地が増大するという点で、際立つであろう。さまざまなバイオテクノロジーおよび精神技術（Nootechniken）は、自己自身と戯れる洗練された協働的な一個の主体をおのずから育成する。このような主体は、もろもろの複雑なテキストと超複雑なコンテキストとつき合いながら自らを形成する。威圧的（主人的）なものは傾向としては完全に終焉せざるをえない。なぜなら威圧的（主人的）なものは粗野な自分を不可能にするからだ。ネットワークでインター・インテリジェント（inter-intelligent 間 知性的）に密接に結ばれた世界*では、主人や暴力を行使する者たちが長期にわたって成功のチャンスをもち続けることはほとんどできない。これに対して、協働者や支援者たち、内容をいっそう充実させる者たちはより多くのより適切なつながりを見いだす。19世紀に奴隷制が撤廃されたのち、21

* 人間の脳とコンピューターが直接融合し、しかもそれが巨大なネットワークと直結している新しい知性のあり方がイメージされている。

世紀あるいは 22 世紀には、もろもろの威圧的（主人的）な遺物の撤廃がはっきりとした形をとるだろう。しかしこのことが深刻な葛藤なしに生じるとは、誰も考えないだろう。というのも、反動的な威圧的（主人的）なものが、新手のファシズムへ向かう大衆的ルサンチマンともう一度結託するということは、ありえないことではないからだ。しかしこうした革命的反動の挫折も、その台頭と同じく、予測しうる。

「あらゆる存在者は善であり、悪はただ善の欠如にすぎない」というプラトンの存在論の根本命題は、批判的な精神の持ち主たちによってしばしば嘲笑されてきた。しかし、コンテクスト（共同テクスト）がいつそう濃密化して行くような世界にあっては、この根本命題がこれまでとは異なる意外な仕方でも、かつ意味をずらしながら、真実であることが確証されるということはあることではない。というのも全体あるいはコンテクストは真ならざるものだ というアドルノの教説*がなおも優位を保っているからだ。プラトンの原理を、端的に情報集約型の生態学的な諸原則（die intelligenz-ökologischen Grundsätze）へと転換しなければならない。すなわち、圧倒的な悪は自己消去的に作用する。圧倒的な善は自己拡張的および自己継続的に作用する。圧倒的に中立的なものは連続性を保全するために、うんざりするほどの過剰を生み出す。これらの原則へと転換しなければならない。

事物についてのそのように解明された見方に反駁するのは、二値性の遺産と戦略的・論争術的パラノイアの遺産が自分の影を来たるべき未来のはるか彼方にまで投げかけているという先述の状況である。複雑な諸関係を暴力的に分割することに向かうもろもろの習慣と強制は、一時代を超えて成長してきたものであって、けっして一夜のうちに雲散霧消するわけではない。疑念とルサンチマンが権力の座についているような諸文化は、それらの成功がもはや妄想でしかないような場所においてさえも、なおも局地的に成長し続ける。利己主義的な同一性の新旧の構成体は、それ独自のもの、すなわち多値性・数多性・同種療法的技術の思考によって生み出されうるかもしれない寛大な^{ポテンシャル}潜勢力を封じ込めるといふこと>をつけ加える。こうしたことが妥当する限り、通俗性（Vulgarität）はそれ相応以上の接続力を発揮し続ける。通俗性は、原主体（粗野な主体）がいつまでも原材料を意のままにすることを目指して努力するよう働きかける。たとえ原主体と原材料とがなおも反発的な姿勢のうちにあるにしても。それゆえ反動はひとつの世界的権力（Weltmacht）であり続けている。反動を反駁することは創造的な知性にかかっている、と強調しなければならないのではなからうか？

このような諸前提のもとでは、ゲノムとその経済的な搾取とをめぐる競走が認知上の戦争として記述されるとしても、けっして偶然ではない。認知上の戦争は極端な場合には、またもや原材料に対する原人間（粗野な人間）の権力行使以外の何ものでもない。すなわち、引き延ばされた

* 『ミニマ・モラリア』第 29 節

錯誤であり、存在者に対する虚偽の分割の固定である。こうした習慣はその失敗によっておのずと論駁されるだろう、とすでに中期的には見込まれる。あらゆる戦争の場合と同様、知性の戦略的で利己主義的で粗野な使用は、知識の隠し立て（Verheimlichung）を強化する。この隠し立ては疑い深い習慣^{ハビトゥス}を新たに勢いづける。しかし、不信と隠し立てという基盤のうえでも、高度に密接になったコンテクストは、頂点に達した技術文化と同じく、停止することなく活動している。形而上学の時代では、人間が人間を無限に超え出てゆくというパスカルの命題が傾向としては真である。このような時代においては、人間はそうなりうるものにまだなっておらず、人間の昇華の階段は上にむかって開かれているという感覚ほど激しいものはない。ポスト形而上学の時代においてはむしろ、人間が人間に対して絶え間なく安値をつける（unterbietet）というイメージが示される。人間はそれを正当と見せかける。安値をつける他の者たちが、彼らと一緒に安値競争（Unterbietungswettbewerbe）のなかに自身も踏み込むよう強制する限りにおいて。古典的な技術の終焉とともに（mit der nachklassischen Technik）、つまり真正の諸技法（Künste）とともに、よりよい競争がすでに始まっているということが、ようやく少数の人々に意識され始めた。

さまざまな資本と帝国が情報に手を伸ばすならば、世界の成り行きは、敵対しあう知性たちが自己自身について下す或る種の神の裁きへとますます向かってゆく。人間の知性使用の決断的な性格が人間なるものをはっきりと認識させるのは初めてではないだろう。二値性の時代の或るキーワードには、次のようにある。

「わたしは今日、天と地とをあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたとあなたの子孫は、生^{いのち}を選びなさい」¹³。

生と死との対立^{アンチテーゼ}が脱構築された時代にあって、人は生^{いのち}の選びをどのように反復することができるだろうか？ 祝福と呪いと単純化された対立を超え出て行くような祝福をどう考えうるだろうか？ 複雑性のなかの或る新しい絆をどう定式化できるだろうか？ これらの問いのなかには、近代的思考は自身の論理学と存在論を明確に自覚しないというちは、いかなる倫理学をも達成できないという洞察が一緒に語られている。

（松田純・野口淳訳）

¹³ 申命記 30・19

(訳者解説)

本論文はペーター・スローターダイク(Peter Sloterdijk)が 2000 年 6 月 6 日ボストン・ゲーテ・インスティテュートで行なった講演である。インターネットでダウン・ロードできる (<http://www.bbpp.de/aufgelesen/depslot2.htm> または Sloterdijk *Der operable Mensch* で検索)。英訳 , イタリア語訳もそれぞれ下記から入手できる。

<http://www.goethe.de/uk/bos/englisch/Programm/archiv/2000/enpslot200.htm>

<http://www.otrocampo.com/3/sloterdijk.html>

Was kostet den Kopf? Ausgesetztes Denken der Aisthesis zwischen Abstraktion und Imagination. Dietmar Kamper zum 65. Geburtstag, hrsg. v. Herbert Neidhöfer u. Bernd Ternes, Marburg 2001. に収録されている。

背景

スローターダイクはわが国においても『シニカル理性批判』(*Kritik der zynischen Vernunft*. 1983. 高田珠樹訳 , ミネルヴァ書房 , 1996 年)などの著者として , よく知られている。1980 年から在野で著述活動を展開し , 「反アカデミズム」の印象を与えてきたが , 1992 年からカールスルーエ造形大学 (通称 HfG : Staatliche Hochschule für Gestaltung Karlsruhe) の哲学教授に就任し , 2001 年からは同大学長を務めている。(カールスルーエ造形大学の HP : <http://solaris.hfg-karlsruhe.de/hfg/inhalt/de/Lehrende/1928> 日本語による大学紹介 : <http://www.kyushu-id.ac.jp/~sn/hfg/hfg.html>)

道徳的秩序の重いドイツにあって , ヒューマニズム的偽善を “シニカルに批判する” 姿勢は , 教会関係者や政治家が説くヒューマニズムをうっとうしく思っている人々には 「一服の清涼剤」であるらしい。マスメディアへの露出度は , 哲学者のなかでは第一位である。2002 年からは ZDF のテレビ番組 “Im Glashaus - Das Philosophische Quartett” (温室 哲学四重奏) の企画編集も担当している。

本論文の前提を知りたい人は『「人間園」の規則 ハイデッガーの「ヒューマニズム書簡」に対する返書』(*Regeln für den Menschenpark*. 1999. 仲正昌樹訳 , 御茶の水書房 , 2000 年)を読むといい。Tierpark (動物園) ならぬ Menschenpark (人間の園) という衝撃的なタイトルが物議をかもした。人間改造技術 (Anthropotechniken) による 「人間の育種化」をめぐって , ハーバマスと激しい論争になった。論争は泥沼化し , スローターダイクはハーバマスらへの書簡のなかで , 「批判理論は死んだ (Die Kritische Theorie ist gestorben.)」と宣告して , 話題になった。

スローターダイクは 「人間の育種化」を肯定しているとみなされた。例えば , ドイツ生命倫理

学界の重鎮ホネフェルダー（現ボン大学名誉教授）はあるインタビューのなかで、こう述べる。

「スローターダイクの間人飼育化(Menschenzüchtung)の考えはあまりにも遺伝子決定論に陥りすぎている。その背後には、自然についての完全に間違った理解がある。われわれは今日むしろ、自然はあまりにも複雑で、ある新しい人間のタイプを狙って作れるわけではないことを、以前よりも一層よく知っている。……飼育者と飼育されるものを区別する人間像は、誰もが倫理的な主体でありうる能力をもつことの上に成り立つ平等原理に根本的に反している」¹。

こうした批判にスローターダイクはあるインタビューで、こう答える。

Das Magazin： あなたは遺伝的素質に介入することによって人間を最善化し飼育すること (optimieren und züchten)を望んでいると非難されていますが。

スローターダイク： 遺伝子技術の助けで人間を飼育したい、などとわたしは一度も言ったことがない。そう言う人は、わたしのテキストを正しく読まなかったか、理解しようとしぬい人だ。わたしはただ、遺伝子技術の発展がわれわれに態度決定を迫る問いを投げかけることを指摘しただけだ²。

しかし、遺伝子決定論が強すぎるという批判はあたっているであろう。さらに本論文では、遺伝子・情報技術を「威圧的なものを終焉させる同種療法的技術」として積極的に肯定しようとする姿勢がいっそう明確に打ち出されている。『「人間園」の規則』と比べて、逆症技術／同種療法的技術という概念区別が本論文の新しい視点と言えよう。

要約

以上が背景説明である。次に訳者が補った節ごとに、本論文の要点をまとめる。

1．ハイデガーは技術文明のなかに「故郷喪失」という根本状況を見、技術の歴史のなかに形而上学による「錯誤」の運命を見た。スローターダイクはハイデガーの形而上学解体の営みを評価しつつも、その技術観は存在者の全体を精神と物とに二分する二値的形而上学に囚われていると批判する。

2．精神でも物でもなく精神でも物でもある存在をヘーゲルは「客観的精神」と名づけた。この構想は今日「情報という原理」として発展してきている。コンピューターに入力され保存された情報は「精神的な」内容でもありながら、実際はディスクのなかの磁気であったりする。高度情報社会における知的活動は圧倒的にコンピューター間の情報のやり取りという形をとる。バイオテクノロジーにおけるゲノム情報の解読とそれに基づく操作も同様である。このような情報操作に基づく現代技術は、精神／物、自然／文化という二分割を前提とする西欧形而上学の枠組みで

¹ Honnefelder, L., Der Mensch droht zu stolpern. in: *Der Spiegel*. 39/1999. S. 318.

² Sloterdijk, P., Anthropotechniken: Der Mensch gestaltet sich selbst. in: *Das Magazin*. 2/2000. S. 10.

はとらえきれない事態であり、かかる形而上学的区別の失効を明らかにしている。

ところが「反テクノロジー的ヒステリー」、例えば遺伝子技術のなかに「機械的なものが主体的なものへきわめてセンセーショナルに侵入していく萌し」を見てとろうとするような見方は、「間違った形而上学的な根本的分割」(古い二値性の論理)に依然として囚われている。

3. そもそも技術が原人から人間を生成させたものであるなら、技術は「本来的に人間を贈与するもの」である。それゆえ遺伝子操作による人体改造の試みも、生命進化過程への深い洞察と結びついている限り、「人間にとってなんら異質なもの」でも、「倒錯的なもの」でもない。

4. 臓器移植から遺伝子治療までの最先端の人体形成術を、間違った形而上学的な区分のもとでとらえてはならない。これまでの技術は、熱が出たら熱さましを飲み、下痢をしたら下痢止めを飲む逆症療法(allopathy)のように、人間にとって不都合な現象を自然に逆らっても強引に抑え込もうとする技術、すなわち Allotechnik (逆症技術)であった。ところが、サイバネティクスと情報技術の発展によって、「支配という形をとらない操作性が成立しつつある」。症状に逆らわずに病気を直そうとする同種療法(homoeopathy)のように、暴力的でないスマートな技術は同種療法的技術(Homöotechnik)と呼べる。

5. 反テクノロジーのイデオロギーは、こうした新しい面を見逃し、主体による客体の支配という旧態依然たる枠組みにとらわれている。

6. 逆症技術の習慣はもはや同種療法的技術の領域にまで食い込んでくることはない。この種の技術の時代には、ハイデガーが言う「錯誤」が生じる余地はますます狭くなり、「威圧的なものは傾向としては完全に終焉せざるをえない」。この技術思考は「敵対者のいない、支配から自由な関係についての倫理を解き放つ潜勢力をそなえて」いる。ただし形而上学の二値的論理学を克服しないかぎり、この新しい倫理学を達成することはできない。

拙著³のなかで、人間への遺伝子技術の適用に対するスローターダイクとハーバマースの立場の違いを、エンハンスメント(増進的介入)という文脈のなかでまとめておいたので、ご参照頂ければ、幸いである。

(松田 純)

³ 松田純『遺伝子技術の進展と人間の未来 ドイツ生命環境倫理学に学ぶ』知泉書館、2005年、第5章